

研究課題:悪性脳腫瘍患者に対する周術期口腔機能管理の効果に関する研究

研究者名:中川量晴¹⁾、古屋純一²⁾、戸原 玄¹⁾、稲次基希³⁾

所属:¹⁾ 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 高齢者歯科学分野

²⁾ 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 地域・福祉口腔機能管理学分野

³⁾ 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 脳神経機能外科学分野

1. 緒言

近年、入院患者の口腔由来の合併症を予防するために、医科歯科連携の重要性が認識され、2012年に「周術期口腔機能管理」が保険診療に追加された。しかしながら、悪性脳腫瘍(Malignant Brain Tumor: MBT)への歯科介入効果についての報告はまだない。MBTは、集学的治療により術後免疫抑制状態になる。さらに嚥下障害による誤嚥性肺炎や低栄養への対策が不可欠である。本研究は、入院中 MBT を対象に、歯科介入が口腔問題、嚥下機能、栄養等に影響するか明らかにすることを目的とした。

2. 対象と方法

当大学医学部附属病院脳神経外科に入院中の MBT 患者を対象とした。評価項目は、基本情報、意識レベル、日本版 modified Rankin Scale (mRS)、口腔の状態(Oral Health Assessment Tool: OHAT)、摂食嚥下機能(摂食嚥下障害臨床的重症度分類:Dysphagia Severity Scale【DSS】、Functional oral intake scale【FOIS】)および栄養に関する指標(BMI、アルブミン値、栄養投与方法)とし、初回と介入終了時で比較した。

3. 結果と考察

対象者は7名(男1名、女6名、年齢中央値:69歳、62-82歳)であった。初診時は、DSS1が1名、2が3名、5が1名、7が2名であり、介入で改善したものは1名であった。また、FOIS1が3名、2と5が各1名、7が2名であり、介入で改善したものは同様に1名であった。BMIとアルブミン値は、不変か低下したものが多かった。栄養摂取方法は、7名中6名が不変で、1名が抹消静脈栄養から経鼻胃管へ変更された。OHATスコアは、7項目および合計点が介入後に低下し、介入により口腔問題が改善した。

本研究では、対象者が7名であったため、歯科介入前後の統計学的な解析は行わず、各対象者の入院中の経過とOHATの変化をまとめた。OHATスコアは、残存歯が増加し、それ以外の7項目が低下した。残根状態は、咀嚼機能低下の原因となり、食形態に影響する。今回の検討では、歯科介入により残根への対応がほぼされていなかった。また義歯関連のスコアが改善した。義歯の調整・修理は、食形態の向上につながり、患者のQOLに寄与するものと思われる。摂食嚥下機能について、今回の検討では十分な嚥下リハ効果を得ることができなかった。栄養状態の指標であるBMIとアルブミン値については、浮腫による体重増加や炎症によるアルブミンの消耗などを考慮する必要があった。

MBT患者に対して、周術期口腔機能管理を実施したところ、OHATスコアの残存歯をのぞく各項目が低下し、口腔問題が改善することが明らかとなった。一方、摂食嚥下機能や栄養状態、栄養摂取方法はほぼ不変であり、今後評価・解析方法の変更を含め、さらに検討する必要がある。